

現代の若者が持つ社会における暗黙の女性観の探索的検討 —文章完成法を用いた質的分析—

平野真理¹ 三浦正江¹ 近藤有美香¹

(2019年11月28日査読受理日)

An exploratory study of women in society from the viewpoint of youth

HIRANO, Mari MIURA, Masae KONDO, Yumika

(Accepted for publication 28th November 2019)

要約

本研究では、現代の若者が内在化している、女性に対するジェンダースtereotypeを探索的に検討することを目的として、1,000名の20代男女を対象に文章完成法を用いた調査を行った。「女性は社会において」「女性の役割は」という刺激語に対して書かれた計2,000の記述について質的分析を行った結果、社会における女性の存在と役割についての16の категорияが生成され、それらのcategoryは《自立した存在—他者に依存する存在》と《社会から求められる価値—社会と離れた価値》という2軸によって整理された。これらの分析から、現代社会において若者が抱く暗黙の女性観として、「権利を奪われている存在」「力のない存在」「可能性をもつ強い存在」「自由な存在」という4つが見出され、社会において価値ある存在になるために他者依存的なあり方を引き受けやすいことに加え、女性がひとりの人間として自由な存在であることで同時に社会の中で価値を失ってしまうという構造が読み取れた。

Abstract

The purpose of this study is to investigate the gender stereotypes of women, as the perception of women is internalized by modern youth. This study uses a text completion method and acquires data from 1,000 men and women in their 20s. A qualitative analysis is performed on a total of 2,000 descriptions written on the thought-provoking words “Women in society...” and “Women’s role is...” Consequently, 16 categories of the existence and role of women in society are generated, and these categories are arranged according to the following two axes: “being independent – being dependent” and “value required by society – value apart from society.” From these analyses, the study finds four implied views of women in modern society: “existence deprived of rights,” “existence as unworthy,” “worthy existence with potential,” and “independent existence.” Finally, the findings concluded that young women take on the role for others in order to feel valuable within society, whereas those who exercise their freedom and live as independent women are viewed as being less valuable within society.

キーワード：女性観、若者、文章完成法

Key words: view of woman, youth, sentence completion test

1. 問題と目的

1.1 現代社会における性役割意識

2018年7月、国内の複数大学の医学部入学者選抜において、女子の受験生が不利になるような不公正な得点処理が行われていたことが発覚した¹⁾。問題の実態については多角的に調査を行い再発防止に向けた取り組みが進められることとなったが、この問題が連日ニュースに取り上げられ、各所への聞き取りが行われる中で、日本社会において依然として続く女性差別が白日の下に晒されることとなった。すなわち、この問題の背景にある“女性は医師という職業にふさわしくない”という差別的な性役割認識の存在が突き付けられたと言える。

「男性役割/女性役割」あるいは「男子らしさ/女子ら

しさ」といった社会における性役割認識に関しては、社会学を中心に多くの研究が積み重ねられてきた。日本においては、男性が外で働き、女性は家の中で男性を支えるという旧来的な性役割での生き方から、1986年に男女雇用機会均等法、1999年に男女共同参画基本法が制定され、男性と女性が社会において均等に機会を得られる社会制度が徐々に整えられてきた。とはいえ、社会の中に根付く認識はそう簡単に変化するわけではない。鈴木^{2) 3)}は、平等主義的性役割態度スケールを作成し、平等主義的性役割態度、すなわち個人としての男女の平等を信じる態度についての国際比較調査を行い、日本人女性の平等主義的性役割態度がアメリカ人女性よりも低いことを明らかにしている。鈴木²⁾の研究は1980年代に行われたものではあるが、近年日本で行われた調査においても8割以上の女性が男女の地位は

1 東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科

平等ではないと感じており、夫は外で働き妻は家を守るべきであるという固定的性役割分担についても4割が賛成と考えていることが報告されている⁴⁾。これは、韓国など近隣のアジアの国々を含めた諸外国の中でもかなり高い割合である。

こうした性役割意識の世代間継承に関する調査では、家規範意識が多世代同居家族において特に継承されやすいことが示されている⁵⁾。また、性役割意識は家庭内において男子よりも女子において強く育まれやすいことも示されている⁶⁾。女性の性役割の中でもとりわけ母親役割に関するものは強固であり、女性には母性本能があるとみなす伝統的母性観が、育児中の女性に内在化されネガティブな影響を及ぼしていることも指摘されている⁷⁾。

1.2 内在化された性役割意識のもたらす制約

さらに女性に対する性役割認識には、家事や育児を担うという役割認識だけでなく、“能力が低い”という存在としての認識もある。代表的なものとして、「数学が苦手である」「論理的思考ができない」といったステレオタイプが挙げられる。行動遺伝学の観点から見れば、研究において性差として示されている結果のほとんどは、実際には個人差としての差の方が大きいにもかかわらず⁸⁾、こうした性差を強調するような社会的言説は現代においても根強い。こうした人々の持つジェンダーステレオタイプが、結果的に女性の本来の能力を抑制してしまうことを示す研究もおこなわれるようになってきている。Tomasetto, Alparone, Romana, & Maraet⁹⁾は、幼稚園から小学2年生までの女兒を対象に実験を行い、ジェンダーステレオタイプをもって扱われることが算数の成績を低下させることを示した。中高生を対象とした日本国内の研究においても、「女の子なのに数学ができてすごいね」というような好意的性差別発言によって、数学の成績が良い女子生徒の意欲が低下することが示されている¹⁰⁾。

また、職業選択場面においても、女子学生は男子学生に比べて自ら可能性を制限しやすいことがわかっている。Betz & Hackett¹¹⁾は、職業社会における女性のキャリア発達について自己効力感の観点から研究を行い、女性が男性に比べて自らのキャリアに関する効力感を持っていないことを指摘した。そこでは女性たちが、自己効力感に必要な4つの情報源である制御体験、代理経験、言語的説得、生理的情動的状態¹²⁾のいずれにもアクセスしにくい状況であることが考察されている。日本において行われた同様の研究でも、男子学生は男性的職業と女性的職業のいずれに対しても同程度の自己効力感を示したのに対して、女子学生は女性的職業に対してより効力感を示す傾向にあることが示された¹³⁾。つまり自分の適性を、女性的職業に偏って見出しやすいということである。そして、自分の職業的能力を高く評価できない女子学生は、学生生活への適応も低

く、職業アイデンティティの形成がうまく進められない可能性が高くなる¹⁴⁾。また就職後についても、若い女性が出産後の就業継続や昇進といった先のキャリアに対する自己効力感が低いことが報告されている¹⁵⁾。

このように、日本社会において男女の平等性が制度として整えられ始めてすでに40年が経過しているものの、ジェンダーステレオタイプは暗黙の価値観や態度として人々に強く内在化されたままであり、そうした価値観は、普段は表面化していなくとも、今回の入学選抜問題のように至る場所において存在していることが推察される。そして、より見えにくい問題は、内在化されたジェンダーステレオタイプが、本来はもっと豊かな女性の能力や可能性を、自ら無意識的に制限してしまうことにつながっていることである。青年期や青年前期の女性のキャリア支援や心理支援を考える上で、こうした暗黙の信念によってもたらされてしまっている自己制限を見出し、自己効力感を高められるような支援を行っていく必要があると言える。

1.3 本研究の目的

これまでの研究において、女性が内在化しやすいジェンダーステレオタイプとしては、職業適性や数理的な能力、空間認知能力などが扱われてきた。しかしジェンダーステレオタイプは、時代と共に少しずつ変化する¹⁶⁾。例えば近年の日本では「女子力」という言葉がさかんに聞かれるようになったが、これは「女らしさ」に比べてより外見の評価の要素が大きいとされている¹⁷⁾。また、現代の職業社会において若い女性が適応するためには、女性性と男性性の両方を持ち合わせているアンドロジニーであることが求められるという¹⁸⁾。すなわち、社会から求められる女性像は時代を反映して変化し続け、現代を生きる若者はそうした女性観を内在化していることが想定される。柴田¹⁹⁾は、2018年に現代女性の女性役割ストレス尺度を作成したが、その尺度の中で測定されている職場での女性役割は、「女性は仕事などで意見をはっきり言うものではない」「男性と同じ職務でも女性には100%仕事を任せられない」「男性よりも経済力のある女性は生意気である」「女性は仕事の責任を回避しがちである」の4項目、日常での女性役割は「女性は男性よりも礼儀作法を身につけることが必要である」「女性はしとやかに振る舞うものである」「女性は家事が上手にできて当たり前である」「手伝いは女性がするものである」の4項目であった。ここで示されている内容のみならず、現代社会において女性に求められているステレオタイプとしての役割は他にも存在すると考えられる。

そこで本研究では、現代の若者が内在化している、女性に対するジェンダーステレオタイプを探索的に検討することを目的とする。内在化された価値観は、本人に意識されていないことが多く、直接的な質問を行っても回答が得られにくい。そこで、女性に関する言葉から連想して思い浮

かぶ文章を作成してもらうという文章完成法²⁰⁾という方法を用いて、無意識的な認識も含めた情報を得ることを目指す。

2. 方法

2.1 手続き

2018年12月、インターネット調査会社のモニターに登録している大学生(20~22歳)および社会人(26~29歳)の女性600名(共学大学生200名,女子大学生200名,社会人200名),男性400名(大学生200名,社会人200名)の計1,000名を対象にwebアンケート調査を実施した。倫理的配慮として、個人情報の取り扱いに関する説明をはじめ、参加を途中でやめることができること、回答に正解はないことなどの説明を提示し、研究協力に同意した者のみが回答ページに進んだ。なお本研究は東京家政大学倫理委員会の承認(板H30-20)を得て実施した。

2.2 調査内容

「以下の言葉に続けて頭に思い浮かぶ文章を自由に書いてください」という教示文を示し、19の刺激語(①女性とは、②女性ができないことは、③女性の良さは、④女性なら、⑤女性はもともと、⑥女性ができることは、⑦女性と男性は、⑧女性は社会において、⑨女性が幸せになるには、⑩女性の能力とは、⑪女性の役割は、⑫もし、女性でなかったら私は(女性のみ回答)、⑬男性と比べて女性は、⑭女性は人生において、⑮自立した女性とは、⑯理想の女性とは、⑰女性がしてはいけないことは、⑱男性とは異なる女性の力とは、⑲これからの女性は)に続く文章の自由記述を求めた。

2.3 分析方法

19種類の刺激語に続けて回答されたデータを概観したうえで、社会における女性観を分析するためのデータとして「女性は社会において」「女性の役割は」の刺激語に対して書かれた計2,000の記述を対象とした。

対象データについて、KJ法²¹⁾を援用したカテゴリ分類による質的分析を行った。具体的には、原則としてひとつの刺激語に対する1人の記述データを1切片として切片化したが、明らかに複数の内容が記述されているものは分けて切片化した。また、意味の判別が不可能なものは除外した。続いて各切片の類似性の観点からまとまりを見出しサブカテゴリおよびカテゴリを生成し、最後にカテゴリ間の関係を軸の視点から検討した。なお、カテゴリ化の作業は臨床心理学を専門とする3名の大学教員によって、複数回の協議を通して行われた。

3. 結果と考察

3.1 社会における女性観のカテゴリ

データのカテゴリ化を行った結果、66のサブカテゴリ、16のカテゴリが生成され、それらは「社会における女性の存在」と「社会における女性の役割」の2つのカテゴリグループに分類された(Table 1)。カテゴリグループごとに、各カテゴリの内容を度数の多い順に説明する。以下、カテゴリ名は【】、サブカテゴリ名は〈〉、ローデータの記述は斜体で示す。

3.1.1 社会における女性の存在

「社会における女性の存在」カテゴリグループに含まれるカテゴリは8つであった。

最も度数が多かった【社会に求められる存在】カテゴリには、〈社会に必要な存在〉をはじめとして、〈社会において重要な存在〉〈社会において大切な存在〉など5つのサブカテゴリが含まれた。具体的にどのように求められるかの記述はなく、女性が社会において必要な存在であることを漠然と表す内容であった。

続いて度数が多かった【権利を奪われている存在】カテゴリには、〈低い立場に置かれる〉を中心に、〈社会で不利〉〈下に見られる〉〈差別されている〉など9つのサブカテゴリが含まれた。これらは、女性自身がどうあるかに関わらず、社会あるいは他者から不当に扱われることに関する内容が表現されていた。

次に、【自立した存在】カテゴリには、〈男性と対等〉〈社会で生きる一員〉〈ひとりの人間〉の3つのサブカテゴリが含まれた。これらは女性が社会の中でじゅうぶんに独立した人間として存在することを示すものであったが、〈男性と対等〉においては、女性が一人の人間であることを示すために敢えて“男性と同じように”と対照させながら表現しているのが特徴的であった。

続く【自由な存在】カテゴリには、〈人それぞれ〉〈役割は決まっていない〉〈なんでもできる〉といった5つのサブカテゴリが含まれていた。これらは【自立した存在】カテゴリと同じように、女性がひとりの人間として存在することを示す内容であったが、【自立した存在】カテゴリが社会の中での基準に達しているというニュアンスを含むのに対して、【自由な存在】カテゴリは女性が自由に主体的にあり方を決められるという内容がメインであった。

【可能性のある存在】カテゴリには、〈もっと活躍できる存在〉〈もっと社会進出できる〉など4つのサブカテゴリが含まれていた。このカテゴリでは、女性は今よりもっと社会の中で活躍できるはずだという、女性の潜在的な社会的価値への期待が読み取れた。

【力のない存在】カテゴリは、〈弱い存在〉を中心に〈能力が足りない〉〈社会において不必要な存在〉など4つのサブカテゴリで構成されていた。“弱い”という抽象的な記

述が多く、女性という存在の広い意味での力の弱さが示されていたが、「(社会において女性は)必要ではない」など、女性が男性と比べて能力を持たず、劣っていることを表すネガティブな内容も含まれていた。

【強い存在】カテゴリーは、〈強い存在〉を中心に〈優遇されている〉〈優位な存在〉など4つのサブカテゴリーで構成されていた。社会の中で優遇されていることや、優位な位置に置かれていることを示す記述が目立ち、ここでの“強さ”は、必ずしも【力のない存在】で書かれている“弱さ”と対称的なものではないことが推察された。

最後に、【他者に依存する存在】カテゴリーには、〈男性と共にある存在〉〈守られる存在〉〈環境によって左右される〉の3つのサブカテゴリーが含まれていた。これらは、女性が【力のない存在】であるからこそ、他者や環境の存在に庇護される存在であり、同時にその環境次第であり方が変わってしまうことを示す内容であった。

3.1.2 社会における女性の役割

「社会における女性の役割」カテゴリーグループに含まれるカテゴリーは7つであった。

度数が多かったカテゴリーのひとつは【子を産む役割】であった。このカテゴリーは〈子を産み育てる〉サブカテゴリーのみで構成され、内容的にもシンプルに出産・育児であると書かれたものが多かった。

続いて、【他者をサポートする役割】カテゴリーは、〈周りの人を支える〉〈男性を立てる〉〈細かい気配りをする〉〈人間関係をうまくつくる〉など6つのサブカテゴリーで構成された。これらは主に人々が働く場において、男性を補佐したり、他者に気を配ったりする役割が求められていることを表す内容であった。

次に、【マルチな役割】カテゴリーは〈多くの役割をもつ〉を中心に〈仕事と家を両立する〉〈両価的存在〉という3つのサブカテゴリーから構成され、社会において女性がたくさんの役割をもち、時に複数の役割を並行して担うことを示すことが読み取れた。

【家庭を守る役割】カテゴリーは、〈家事をする〉〈家庭を守る〉〈家族のケアをする〉〈家にいる〉の4つのサブカテゴリーから構成され、家の中で家庭を守り、家族を支えるという旧来的な女性役割に関する内容であった。

【癒しを提供する役割】カテゴリーには〈人を癒す〉〈周りを笑顔にする〉〈情緒的に受け入れる〉など5つのサブカテゴリーを含んでいたが、【他者をサポートする役割】カテゴリーと同様に、働く場における女性の役割に関するものであった。ここからは、女性が場において情緒的な安らぎや活力をもたらし、他者に喜びを与えるような、環境としての役割が求められていることが読み取れた。

続いて【女性が得意な仕事】をする役割】カテゴリーは、〈女性としての役割を求められる〉〈女性にしかできないことがある〉など4つのサブカテゴリーを含んでいたが、

これらはひとりの職業人としての一役割ではなく、敢えて“女性としての”“男性ができない”といった枕詞がついており、一般的な仕事、すなわち男性が担っている仕事との比較の中で述べられていた。

最後に【社会を引っ張る役割】カテゴリーは、〈活躍している存在〉〈社会で役割を担う存在〉〈正義の声を上げる〉という3つのサブカテゴリーを含み、これらは社会の中で主体的・能動的に活躍し、時にリーダーとして社会を動かすような役割についての内容であった。

3.2 社会における女性観の2軸による理解

得られたカテゴリーから読み取れる、社会における女性観の構造を理解するために、カテゴリー間の関係を軸の視点から検討した。各カテゴリーの抽象度の違いを鑑みて、軸の基準となるカテゴリー、軸に付置される役割についてのカテゴリー、軸と照らし合わせて理解できる女性観のカテゴリーを選別しながら検討を行った結果、最終的に、《自立した存在—他者に依存する存在》という自立—依存軸と《社会から求められる価値—社会と離れた価値》という社会的価値軸の2軸によって整理された (Figure 1)。

《自立した存在—他者に依存する存在》軸は、【自立した存在】カテゴリーと【他者に依存する存在】カテゴリーを両端にもつ軸である。女性が働く場において求められる役割に関するカテゴリーとして得られた【他者をサポートする役割】【癒しを提供する役割】【女性が得意な仕事】をする役割】は、いずれも独立した個人として機能する役割ではなく、他者ありきで成り立つ役割である。また、職業社会を離れた家の中での役割である【家庭を守る役割】【子を産む役割】というものも、家族という他者ありきで成り立つものである。したがってこれらの役割は《他者に依存する存在》側に付置された。一方、【社会を引っ張る役割】というのは、他者の存在に依らず、自らが主体的に機能する役割であるため、《自立した存在》側に付置された。そして、それらの役割を複合的に担う存在としての【マルチな役割】は、他者に依存する存在としての側面と、自立した存在としての側面の両方を持つものであると考えられたため、中央に付置された。

《社会から求められる価値—社会と離れた価値》軸は、【社会に求められる存在】カテゴリーの中に混在する、職業社会で求められる価値と、職業社会から離れた場での価値を両端に持つ軸である。《社会から求められる価値》側に含まれる領域には、先に示した軸における《自立した存在》としての価値と、《他者に依存する存在》としての価値がある。前者は【他者をサポートする役割】【癒しを提供する役割】【女性が得意な仕事】をする役割】であり、後者は【社会を引っ張る役割】であると言える。同様に、《社会から離れた価値》に含まれる領域にも、《自立した存在》としての領域と、《他者に依存する存在》としての領域があり、《他

者に依存する存在》としての領域には、【家庭を守る役割】
【子を産む役割】が当てはまる。しかしながら、《自立した存在》の領域にあてはまる具体的な役割に関するカテゴリーは見出されなかった。つまり、職業社会から求められるものとは異なる価値において、家庭ではない領域、すなわち「個」としての女性の価値をもたらす役割は、データから得られなかったことが明らかになった。

次に、得られた2軸とそこに付置された役割から、女性観についての5つのカテゴリーが付置された。まず【権利を奪われている存在】は、社会あるいは他者から不当に扱われることに関するカテゴリーである。つまり、《社会から求められる価値》の領域のうち、主に自立した一人として扱われていない、《他者に依存する存在》としての領域に付置される女性観であると考えられた。【力のない存在】は、存在として弱く自立できない、すなわち《他者に依存する存在》であり、かつ、社会において役割を担えないことを示すカテゴリーであることから、《社会と離れた価値》領域に付置された。次に、【可能性のある存在】については、女性の社会における潜在的な価値を期待する内容であることから、《社会から求められる価値》および《自立した存在》の領域に付置されると考えられた。【強い存在】に関しても《自立した存在》であると考えられたが、もう一方の軸については、産業社会の場における良い意味での力強さを示す内容に加えて、ネガティブな意味での優遇性も含まれており、《社会から求められる価値》と《社会と離れた価値》の両方にかかる領域に付置された。【自由な存在】については、社会の価値基準にとらわれない《社会と離れた価値》領域であり、また、主体的に自分のあり方を決定する《自立した存在》であるが、他者に依存する自由もあるという意味で、《他者に依存する存在》領域も含められる形で付置されると考えられた。

4. 総合考察

本研究では、現代の若者が暗黙に内在化し得る社会における女性観を探るために、投影法を用いた探索的検討を行った。その結果、社会における女性役割と女性観を、《自立した存在—他者に依存する存在》と《社会から求められる価値—社会と離れた価値》という2軸4領域から理解することができた (Figure 1)。

Figure 1における第1象限の領域に位置する女性観は、権利を奪われている存在である。これは、他者をサポートし、癒しを提供し、「女性が得意」な仕事をするという、現代の職業社会におけるニーズに沿ったあり方である。つまり、社会において価値を持つことと引き換えに、他者依存的な生き方を引き受ける必要がある。第4象限に位置する女性観は、社会の中で力のない存在である。これは、家庭を守り、子を産むというように、職業社会とは離れた場で

役割を担おうとすることとつながっている。第1象限及び第4象限に見られる補佐的役割としての女性観は、いわゆる旧来的な女性観であり、先行研究においても繰り返し指摘されているものであるが、こうした女性役割が現代の若者においても強く内在化されていることがわかる。すなわち、女性が社会において価値を持つために、社会から求められるニーズに合わせて本来持つ能力を制限した役割をとろうとすることにつながるだろう。

第2象限に位置する女性観は、可能性をもつ強い存在である。ただし現状ではまだ力を発揮できていないことが多く、社会の中で力を持ち、社会を引っ張る役割を担える可能性を期待するものである。第3領域に位置する女性観は、自由な存在である。これは、社会の中でひとりの人間として自立し、主体的にあり方を決めていける存在である。第2象限の女性観が、自立した女性観でありながらも社会において求められる男性役割を反映したあり方であるのに対して、第3象限の女性観は、本来の意味で自立した自由なあり方である。しかしながら、職業社会から離れた場における、「個」としての価値をもたらすような具体的な役割はなく、女性が自由な存在であることは、同時に社会における価値を失うことになることがわかる。

これらのことから、第一に、従来指摘されてきたように、女性が社会において力のない存在であるという価値観を内在化することによって、社会において価値ある存在になるために、社会から求められる補佐的な役割を担い、他者依存的なあり方を引き受けようとしてしまうことが推察された。そして第二に、現代社会において女性がひとりの人間として自由な存在であることは、同時に社会の中で価値を失ってしまうという構造が存在することが示唆された。したがって、若年女性のキャリアにおける自己効力感を支援する上では、必要以上に社会の価値に沿おうとすることによる自己制限を緩和させる必要があると同時に、社会における役割を離れた自由で主体的なあり方が、社会のニーズとは異なる形で価値を持つことを実感できるようなモデルの提示が必要であると考えられた。

本研究では暗黙の女性観の内在化により自己の可能性を制限してしまう課題を検討する中で、主体的で自由な女性観の欠如という新たな課題が見出された。今回は女性観のみの検討を行ったが、男性観との比較の中で検討を行うことでさらに考察を深める必要がある。また、今回はどのような女性観が抽出され得るかを広くすくいあげることが目的としたため、データを男女別に分けることなく分析を行った。しかしながら本来は男性と女性では有する女性観の傾向が異なることが想定される。今回得られたカテゴリーを基準に、今後、性差について質的・量的な比較を行っていくことが求められる。

Table 1 社会における女性観のカテゴリー

CG	カテゴリー	サブカテゴリー	度数	回答例
社会における女性の存在	社会に求められる存在 (365)	社会に必要な存在	201	必要不可欠
		社会において重要な存在	81	重要な存在
		社会において大切な存在	53	大切な存在
		社会に貢献する存在	25	役に立つ
		良い存在	5	嬉しい存在
	権利を奪われている存在 (213)	低い立場に置かれる	56	低い立ち位置にある
		社会で不利	31	不利である
		下に見られる	29	下に扱われている
		差別されている	25	まだ差別がある
		生きづらい	20	仕事が生づらい
		不平等な扱いを受けている	15	男性と対等な扱いを受けていない
		正当な評価を受けていない	15	もっと評価されるべきだ
		進出できない	15	まだ進出できていない
	冷遇されている	7	冷遇されがち	
	自立した存在 (127)	男性と対等	86	男性と同じ価値がある
		社会で生きる一員	22	社会の一員として生きること
		ひとりの人間	19	あくまで一人の人間である
自由な存在 (115)	人それぞれ	48	人それぞれ	
	役割は決まっていない	38	女性だからというものではない	
	なんでもできる	15	なんにでもなれる	
	自分で決める	10	自分で見つける	
可能性のある存在 (93)	自分らしく生きる	4	自分らしく生きる	
	もっと活躍できる存在	65	もっと活躍できる	
	もっと社会進出できる	12	もっと進出するべき	
	社会に進出しつつある	12	少しずつ進出している	
力のない存在 (74)	成長している	4	成長している	
	弱い存在	53	弱い	
	能力が足りない	9	男性よりやや劣る	
	社会において不必要な存在	8	必要ではない	
強い存在 (49)	役割が限られる	4	すくない	
	強い存在	24	強い	
	優遇されている	11	優遇されてる	
	優位な存在	10	優位な立場	
他者に依存する存在 (20)	尊敬される存在	4	尊ばれるべき	
	男性と共にある存在	7	男と共存して行くこと	
	守られる存在	6	守られるべき	
	環境によって左右される	7	会社次第	
社会における女性の役割	子を産む役割 (141)	子を産み育てる	141	子育て
	他者をサポートする役割 (130)	周りを支える	74	人を支えること
		男性を立てる	16	男性をおだてる事
		細かい気配りをする	14	細やかな気配りをする事
		人間関係をうまくつくる	14	潤滑油である
		見守る	8	見守ること
	環境を整える	4	安心できる雰囲気をつくること	
	マルチな役割 (123)	多くの役割をもつ	112	たくさんある
		仕事と家を両立する	6	家と仕事を両立する
		両価的存在	5	下であれば上でもある
	家庭を守る役割 (103)	家事をする	48	家事
		家庭を守る	37	家庭を守る
		家族のケアをする	11	家族を支える
		家にいる	7	家庭的
	癒しを提供する役割 (78)	人を癒す	29	癒すこと
		周りを笑顔にする	22	周りを明るくすること
		情緒的に受け入れる	17	包容力
かわいく・美しくいる		7	かわいくいること	
「居る」ことを求められる		3	居るだけでいい	
「女性が得意」な仕事をする役割 (48)	女性としての役割を求められる	22	その視点が求められる	
	女性にしかできないことがある	11	男性にしにくい事、やれない事ができる	
	女性としての感性	11	デザインの要素	
	事務的仕事をこなす	4	整理整頓する	
社会をひっぱる役割 (37)	活躍している存在	18	活躍している	
	社会で役割を担う存在	14	リーダー的立場にもなりうる存在	
	正義の声をあげる	5	世の中を正す	
	分類不能 (286)	特にない	165	特にない
わからない	103	わからない		
その他 (分類困難)	18	もちろん		

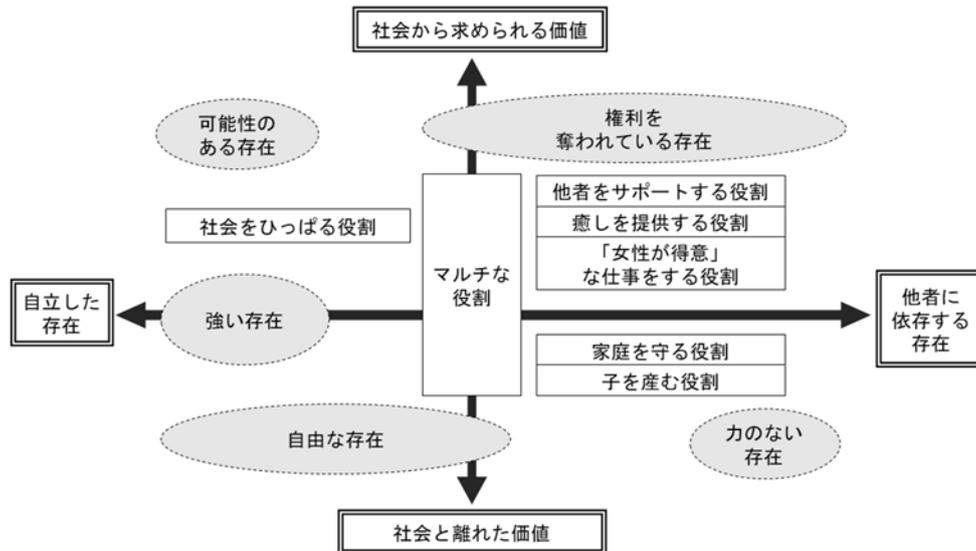


Figure 1 社会における女性観の2軸による理解

付記

本研究は、2018年度東京家政大学研究ブランディング事業の助成を受けて行われた。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2018). 医学部医学科における不適切な事案の改善状況等に関する調査結果 (平成31年度入学者選抜について) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/12/14/1409128_005_1.pdf1 (2019年9月27日アクセス)
- 2) 鈴木淳子. (1991). 平等主義的性役割態度: SESRA (英語版) の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較. *社会心理学研究*, **6**(2), 80-87.
- 3) 鈴木淳子. (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. *心理学研究*, **65**, 34-41.
- 4) 男女共同参画推進連携会議 (2019). 男女共同参画ハンドブック <http://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/handbook/index.html> (2019年9月27日アクセス)
- 5) 水上喜美子・赤澤淳子・小林大祐 (2009). 三世代同居意識と家規範意識に関する研究——世代と家族形態からの検討——. *仁愛大学研究紀要. 人間学部篇*, **8**, 45-52.
- 6) 柏木恵子・久野洋子・門馬公子・村山真理 (1973). 子供の性役割学習過程——母親の要因との関連で——. *東京女子大学論集*, **23**(2), 73-99.
- 7) 大西由希子・良村貞子 (1997). 伝統的母性観の影響下における母親の育児観——母親役割期待に関する調査から——. *北海道大学医療技術短期大学部紀要*, **9**, 1-12.
- 8) 佐々木肇子 (2017). 性差のメカニズム. *心理学評論*, **60**, 3-14.
- 9) Tomasetto, C., Alparone, F. R., & Cadinu, M. (2011). Girls' math performance under stereotype threat: The moderating role of mothers'

gender stereotypes. *Developmental psychology*, **47**, 943.

- 10) 森永康子・坂田桐子・古川善也・福留広大 (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ. *教育心理学研究*, **65**, 375-387.
- 11) Betz, N. E. & Hackett, G. (1981) The relationship of career-related self-efficacy expectations to perceived career options in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, **28**, 399-410.
- 12) Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W.H. Freeman.
- 13) Matsui, T., Ikeda, H. & Okunishi, R. (1989) Relations of sex-typed socializations to career self-efficacy expectations of college students. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 241-250.
- 14) 鹿内啓子・後藤宗理・若林満 (1982). 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究——性役割タイプと自己能力評価を中心として——. *名古屋大学教育学部紀要*, **29**, 101-136.
- 15) 小泉大輔・朴弘文・平野光俊 (2013). 女性活躍推進施策が若年女性のキャリア自己効力感に与える影響. *経営行動科学*, **26**, 17-29.
- 16) 湯川隆子・清水裕士・廣岡秀一 (2008). 大学生のジェンダー特性語認知の経年変化——テキスト・マイニングによる連想反応の探索的分析から——. *奈良大学紀要*, **36**, 131-150.
- 17) 大上真礼・寺田悠希 (2016). 「女子力」と「男らしさ・女らしさ」に違いはあるか——測定語の変遷に着目して——. *田園調布学園大学紀要*, **11**, 169-188.
- 18) 田村綾乃 (2018). 成人前期の有職女性における女性性・男性性と職場ストレスの関係——成人前期男性及び中年期女性との比較から——. *跡見学園女子大学文学部紀要*, **53**, 253-263.
- 19) 柴田恵子 (2018). 女性勤労者の女性役割ストレスの検討——女性役割ストレス尺度作成と女性役割ストレスの属性による差異の検討. *Journal of Health Psychology Research*, **30**, 133-141.
- 20) 佐野勝男・槇田仁 (1960). 精研式文章完成法テスト解説: 成人用. 金子書房
- 21) 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために. 中公新書